

# 「精密受診は早くすること」

宇宿アヤ子

「十一月十日の大腸がん検診の結果、精密検査の必要がありますので早めに医療機関を受診して下さい」と封書が送られてきたのは、十二月二十日を過ぎていた。まあ正月を済ませてからと受診をのぼした。一月になったら、二月三日の上京の予定が済んでからにしようとまた先送りした。

二月末の予約がとれた。三月三日に結果がでた。医師は「大腸がんです。切ってとってもらってきてください」と静かに宣告した。私は言葉を失い、静かに入院予約を依頼した。

毎年の市の検診は受けているし、精密が言ってくればすぐに受診していたのに、今回に限って時間をおいた。これといった自覚症状はなかった。少し痔があるなど思っていたのは癌だったのか。

潔く癌を受け入れて手術の日を待っている自分と気持ちの整理がつかなくていらしている時間が交錯しはじめた。どうして十二月に受診をしなかったのかと自分を責める。受診までのこの間に、癌はどんどん増殖したのではないか、入院までのこの十二日間に悪化をしているのではないかと不安が募りだした。入院を早くしてもらおうわけにはいかないのかと思つたが「順番ですから」と言われるなどはやる気持ちを抑えた。

夫は図書館に行き、パソコンで大腸がんの情報を集めて「大腸がんは癌の中でも最もやりやすいそうだ。長い腸のその部分だけを切

って捨てればいいそうだぞ」という。「霧島神宮にお参りして、その先にあるそばを食べにいこう」「イオンでなにかおいしいものを食べてこよう」とあれこれ持ち掛けてくる。私の気持ちを紛らそうとしているのがわかる。しぶしぶ従った。癌と食事についてご馳走はよくない、反対に食事が大事という説を聞いた覚えがあるが今はどうでもいい。

家の中にいてもじつとしておれない。タンスの整理を始める。税の申告の仕方を夫に伝える。保険の書類を整理する。三、四月に予定のボランティアは社協に肩代りを依頼する。役員をしているのは放棄してもらおう。趣味のダンスの仲間には、入院手術してくるねと再起を誓っているように明るく話していた私。

入院にあわせて帰郷した息子たちが、主治医の説明にたちあったり、夫の食事の配食の手配をしたりと奔走してくれた。私はその頃は立派な癌患者だった。

手術が終わり、ベッドに横になっている私に「手術前はすごく険しい顔をしていたよ。今が本来のお母さんらしいよ」とほっとした笑顔で声をかけてくれた。

すべては精密受診を早くしなかった事が騒動のはじまりだった。十二月中に受診をしておればこれ程混乱したり、後悔もしなかったかと思う。癌のステージはⅠだった。

検診は受けるべし。精密検査は早くすべし。という教訓を再認識した経験だった。